請、覚右衛門申付、丈夫に出来た。

人足六二、一一二人と見積っても増減はあるだろう。足まとい一五〇人程ずつお貸しなされたら、人足の中一万四～五、〇〇〇人も減るであろう。恩堀より蟹川まで川除のことは、覚右衛門殿が見分次第下奉行一人の割に足まとい二〇人程、同人足三～四、〇〇〇人程毎日差出し普請させた。人足には去年通り一日一人米一升ずつとらせる。

六月になって十七日より十八日まで雨降り、大川増水したが、今度孫兵衛に申付けた新寺（飯寺）の川除及び去年覚右衛門に申付けた蟹川村川除は破損しなかった。

七月になって向羽黒岩崎の下一ノ堰まで、米塚の宮前三ヵ所普請、同人足一万五～六、〇〇〇人にして出来たその八月までに、盆後より足まとい三～四〇人に増し、七月十七日の洪水で、去年、当年普請した川除、そこここ破損したから、こられの所をも修覆した。この人足六、〇〇〇人随時申付けて普請させた。」

翌八年（一六六八）大川筋川除御普請成就の項には次のようにみえ、安田孫兵衛が当時勝れた技術者であり、堤防工事の緊要なこと、人足は農閑期に求めることなど、当時の河川修築の様子が大体うかがわれる。

「大川筋川除普請は去年から丈夫に仰付けられたから、去年の洪水にも田地の水損がなかった。ついては御代官安田孫兵衛はその中から川除奉行人に仰付けられ、今月も危険箇所修築仰付けられた。向羽黒より坂下街道辺までの川筋は、年々普請をしなくては叶わない箇所がある。

川除のことは肝要であるが、農事を妨げ、民力を費すことであるから、よく勘弁してやらなくてはならない。小奉行一人足まとい一五人差添え、その外人足御扶持方など、諸事去年の例で御普請を相始め、農隙を見合い、百姓共手すき次第遣されるようにする。